



蟬の鳴き声だけが聞こえる。まだ残暑が厳しい8月の末、以前から訪れたいと思っていた雑司ヶ谷の墓地にようやく足を運ぶことができた。じわっと汗が滲む。墓地の入り口にある花屋で2束の花を買い求め、水を入れた桶を借りて、漱石が眠っているお墓に向かった。小交差点を越えて左斜めに足を進めると、1'14'1'1列の標識が目に入ってきた。角から1つ目の小道を左折し、2区画目の左手に漱石のお墓を見付けることができた。この墓地には漱石の作中の重要人物がもう一人眠っている。『ころ』の『先生』の友人Kである。

## 『先生』の死はアポトーシス?!

— 漱石の不朽の名作『ころ』100年を迎えて思うこと —

情報広報部

橋本 洋一

『私はその人を常に先生と呼んでいた。』漱石の『ころ』はこの文章で始まる。『ころ』の連載が朝日新聞紙上で1914年4月に開始され、同年9月にはじめて岩波書店から刊行された。本年9月で100年を迎える。私が初めてこの作品に目が触れたのは高校1年の夏休みであった。読むことになったきっかけは定期購読していたある月刊学習雑誌の附録として、小単行本の形でついていたからである。以来、数えきれぬほど、何回も読んだ。読むたびに新しい発見が常にあった。この作品は私にとって単に初めての長編小説であるばかりでなく、人生を生きる指南書として、心に残る作品であった。あまりに

のめりこんだためか、小説の世界と現実の世界が交差し、両者が混同したような感覚の中に身を置くこともしばしばであった。『私』同様、私も先生の魅力に引きつけられ、空想の世界で先生宅にお邪魔していたのである。

この小説の最大の謎は『何故、先生は死を選ばなければならなかったのか?』であろう。先生は父方の叔父に財産の一部を騙し取られたことで人間不信に陥る。その一方で生活に窮した幼なじみの友人Kを助けるべく、下宿の奥さんの反対を押しきって下宿に迎え入れる。しかし、友人Kから御嬢さんに対する恋心を告白されて、衝撃を受け、秘密裏に下宿

の奥さんに「御嬢さんをおにください」と頼みこみ、御嬢さんを手に入れる。Kは奥さんから先生と御嬢さんが結婚することを聞いた夜に自殺する。

先生は御嬢さんを手に入れるために卑怯な手段を用いたという点で軽蔑してやまない叔父と同レベルの人間に落ちてしまった。そして、奥さん(かつての御嬢さん)の顔を見るたびに卑劣な自分自身の姿を思い起こし、次第に厭世的な人間になつていく。先生はKに対する贖罪の気持ちから、毎月、月命日に唯一人で雑司ヶ谷のお墓にお参りするのである。

『私』は先生を心から尊敬していた。先生は『私』の知的好奇心を満足させるに足る深い洞察力を有する知識人であったが、同時に『倫理の人間』でもあった。『異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いてきたのです』と頻繁に先生宅を訪れる『私』の行

動心理を分析し、『多くの善人がいざという場合に突然悪人になるのだから油断してはいけない。造り付けの悪人が世の中にいるものではないのです。』と人間生来持ち合わせている負の一面について冷静な目で言及している。先生は過去の自分自身と対峙し、卑劣な自分自身との決別とKへの贖罪の気持ちから、自殺を実行に移すが、それを可能にしたのは、先生が経済的に恵まれた環境にあり、先生の死後、奥さんが生活に困らないことが担保されていたという事実に加え、自分の暗い過去を真面目に受け止めようとしている『私』との出会いがあったためと考えられる。

『私』は気付いていないようだが、『私』が先生と出合い、先生から真面目な人間であるとお墨付きを貰ったのとほぼ時期を同じくして、『私』のころ(原文では胸)に新しい命が宿ることを期待して、死へのカウントダウンが作動し、『アポトーシス(計画されていた死)』が組み込まれたのである?!

『恋は罪悪ですよ。…そして、神聖なものですよ。』と言った先生はKを裏切ったという一点をのぞくと、常に『倫理の人間』であり続けた。そして、奥さんに対して神聖な愛を貫いたのである。

先生の遺書がピラミッドの壁をきわめて真面目できめ細やかな言葉という石材で埋め尽くすように書かれたために、『ころ』という作品が最高級の人生訓の書といえるレベルまで仕上げられ、一部血生臭い場面を有するものの、独特の清涼感や温もり、そして倫理観を合わせもった完成された作品として、私達読者のところの中で過去1世紀の間、いや今後もずっとやさしく灯り続けるのである。